



狭山池博物館 官民協働運営

発足物語

狭山池まつり実行委員会 会長 武田 博允



橋下徹前大阪市長は、大阪府知事就任直後の平成二十年二月、財政非常事態を宣言し、ハコモノ集客施設の廃止や文化事業のゼロペーソでの見直し等の改革案を打出した。大阪府には「弥生文化博物館」「近つ飛鳥博物館」があり、3つの博物館は多過ぎると、狭山池博物館も対象となったのがこの物語の始まりでした。

そこで博物館がなくなったら大変と府都市整備部と相談し、視察時に、私が橋下知事に付き添い、狭山池と狭山池博物館が如何に地域に愛され市民の街作りとコミュニケーションづくりの拠点になるかを伝える一方、同じ想いの表現倶楽部うどいの子供たちや若者約3百人が歓迎の前面に出て「徹ちゃん頑張つて」の一斉コールも沸きあがる中、お迎えした。
視察後の講評は大変厳しいものであったが、何か他の博物館と違うものを感じられたのか「この博物館は存続させる」と云われた。

そして四月、前吉田市長との会談で大阪府と大阪狭山市との共同運営に民間(狭山池まつり実行委員会)を加えた三者協働運営の枠組みが合意された。

しかしここからが大変だった。公立博物館の運営に市民団体が加わるのは全国初といわれ、大阪府、大阪狭山市と我々との葛藤が始まった。何事も法律・条令・規則に則って型に填まった仕事をする行政と、出来るだけ無駄を無くし物事を柔軟に考えて行う民間とは考え方に大きな差があり、延べ十六回に及ぶ調整会議(交渉)で激論を交わした。

三者協働スキームの提案、基本理念の共有、三者の役割分担、運営経費の効率化にも言及した。特に具体策の構築時に、土木博物館としての学術的向上と入館者数の目標値を指摘した。毎年八万人前後更にと減少傾向であるにも関わらず、施設指標の入館者数に関心が乏しいと感じ、入館者十万人以上の目標を設定させ、当方から「世界の昆虫展」(都市整備部所管の箕面昆虫館から昆虫標本を借用し展示)、「小灘一紀絵画展」(日展評議員作品展等)を企画提案した。

ところが、「この博物館には絵画は似合いません」博物館に昆虫を持ち込むなんてのもっての外」と云う

反応でした。そこで「似合うとか似合わないという問題ではない、これらを見に来る方は本来の展示物もご覧になるだろうし、何としてでも入館者数を増やし、より多くの人に知ってもらおう取り組みをしなければ、この博物館の存続に関わりませんよ」と説得し実施に踏み切った。

結果「世界の昆虫展」は一ヶ月で一万人、「小灘一紀展」は四週間で八千人の入場者があり初年度に入館者数一〇万人達成した。

また、中高生のアイデアを活かした屋上ガーデンの賑わいと魅力作り(花壇・ウッドデッキ)や博物館ボランティアの再編成などにも取り組み、狭山池堤から屋上ガーデン、博物館へのルートも確立。博物館ボランティアによる「河内木綿展」や狭山池歴史ウォーク、古文書を読む会などボランティア活動も活発化し、毎年十万人前後の入館者数で推移するに至っている。

今では当たり前になった官民協働運営ですが、現在、博物館ボランティアによる「片桐且元展」の準備や狭山池築造千四百年記念事業年に向けての企画、缶バッジの自作作成等活発な市民ボランティアの活躍に期待が寄せられている。